

2012年日本金融学会春季大会
国際金融パネル「欧州財政危機の要因とその世界的波及」

「ユーロという実験：通貨同盟における域内インバランス、クロスボーダーバンキング、債務再編、構造改革、金融システムの安定性」

報告者：鯉淵賢（中央大学商学部金融学科）

【報告要旨】

ユーロ圏危機は、先進国間で採用された通貨同盟が実際にどのように機能するのかについて金融政策のみならず、銀行行動、金融システム、財政政策、実物経済等に渡る様々な具体的事実を提供した。本報告では、これらについて以下の3つの主要な論点についての整理と考察を行う。

第1に、1999年のユーロ導入以降の域内インバランスの拡大とそれを仲介した民間部門の資金フローについて論じる。特に、欧州銀行のクロスボーダーバンキングの役割、その背後にあるユーロ圏各国間の生産性格差、ユーロ圏内の統合された金融監督の不備、BIS規制上の国債保有のバイアスの影響を考察する。結果としてユーロ圏周辺国の国債がユーロ圏内の大手銀行によって広く保有されたことの意味を考察する。

第2に、2007-09年の世界金融危機の顕在化以降のユーロ圏内周辺国への民間資金フローの反転について論じる。特に欧州銀行によるクロスボーダーの国債保有の解消、加盟国中央銀行間のTARGET2勘定のインバランスの拡大を考察する。さらに、ECBによる金融システム安定の役割の不備という環境下で、証券市場プログラム(SMP)と長期資金供給オペ(LTRO)のもたらした効果を検討する。

第3に、名目為替レート調整のない環境下での国家債務再編と構造改革について銀行部門への影響を中心に考察する。さらに、通貨同盟内の加盟国の構造改革に貢献するユーロ圏内のマクロ政策の調整について論じる。

また、以上のユーロ圏危機が日本の債務問題と今後のアジアの経済協力について持つインプリケーションを考察する。